

# 研究論集 第十五卷第一號

研 究

## 歴史、國家および學問

大 熊 信 行

は し か き

本稿は『國家總力戰理論の基礎』と題する長篇（國防經濟學大系第一卷收載）の一節をなすものであるが、一應切りはなしても意味をもつと考へ、編輯者の勧めにしたがつて、誌上に發表する。今日、世界史の問題を、經濟的觀點からのみ解明できると信じてゐるやうな者は少いけれども、しかし一部の經濟學者は、依然として世界過程の經濟的分析から、なんらかの歸結を求めようとする習性を、脱却してゐない。しかるに大東亞共榮圏の理念は、そのやうな過程分析からは決して生れず、敢てこの理念を結びつけようとするれば、その論策は『作文』のごときものと化するのである。わたくしは新らしい勉強の手はじめとして、同時代の他の精神諸科學の領域に働く人々に着目しなければならなくなつてゐる。

1

かつて豫期しなかつた苦惱が、近代科學を貫いてゐる。われわれは近代科學の方法的限界に疑問をもちはじめ、知識の一層廣大な統一を欲求してゐる。はたして經濟學は、今日以上の廣大な領域を、科學的對象として、統一的に取扱ふことが不可能であるかどうか？ われわれはそれが可能であるとの見解のうへにたち、その包括的な統一原理を配分原

理であるとする。總力戰理論が一箇の科學たるべきであるか否かは議論の存するところであるとして、われわれはこれに科學的本質をあたへようとするのである。

おもふに知識の統一性を解體したものは近代ヨーロッパ精神であつた。この精神のうへに自然科學が成立したのみならず、文化諸科學までがそのあとにつゞき、科學の分化はおのの領域を孤立化におとし入れた。具體的な對象を分解し、その部分を特殊科學の對象として排他的に取りあつかふ立場からみれば、自然現象を相手とする精密科學こそ科學の模範なのであつて、普遍妥當的法則概念の獲得は文化科學もまた渴望するところであつた。かゝる近代的精神の下において、地をぬいてその渴望をみたしたものは經濟學であつた。メンガーは、理論的自然科學と理論的社會科學との間の對立は單に現象の對立であつて、方法の對立ではないといひ、ワルラスは、交換價値の理論をもつて數學の一分科であるとした。數理經濟學・純粹經濟學・理論經濟學等の名稱は、それぞれ意味重點の置きどころが違つてゐたにせよ、近代科學に共通の精神を、表面に押し込んだものであり、純粹經濟學の稱呼において、特にその方法的態度の強調が示されたのである。<sup>1)</sup>

すなはち純粹經濟學においては、經濟現象は他の一切の歴史的・社會的現象から切斷され、孤立化した自律的秩序の形成過程として觀察され、經濟の歴史的・政治的現實における全體的把握の欲求は、非科學的であるとして疎外された。純粹經濟學の目的は交換關係における經濟的諸量の均衡運動を探究するにあるのであつて、何をその場合の與件として數へるかは必ずしも一定してゐないが、しかし國家を他の與件とともに括弧に入れることについては、微塵も疑はれた例がない。理論體系としては、國民的な基礎的諸條件をすべて捨象し、さらに政策主體および財政主體としての國家とその政策活動は、これを體系外に押しつけ、個別的な經濟主體は、これを高度の抽象化によつて、辛くも體系の基底に

存置する。その體系目的は價格論であり、理論的前提は、經濟秩序における自由主義原則の支配である。われわれはここに近代ヨーロッパ精神の一結晶を見いだす。

おもふに人は科學者として二つの活動面をもつ。一面においては、經驗科學の一定領域に蓄積された知識の習得・吟味・再整理が仕事であり、同時にその理論的な概念用具を武器とする現實的資料の處理である。他の一面においては、現實的な主體的經驗が、そのまゝ學問的資料なのである。いま、後者の意味における現實の歴史的體驗にたいする内奥の思索を輕んずるならば、前者の一面における研究がいかに滞りなく進行してゐるとしても、そのやうに進行してゐるといふこと自體が、却て一つの危險を意味するものとなるであらう。このことは一つの時代が安定期にある場合においては多く問題とならないことであるけれども、時代が歴史的地氾りのごとき地鳴りを呈して大いなる轉換を遂げつゝある時機に際會しては、最も注意を要する點である。すなはちわれわれは時として手を動かすことをやめ、これまでの仕事を脇においてでも、歴史の聲に聽かなければならず、そして歴史の聲に聽くとは、われわれが現實的直觀の地盤において體驗を反省することである。

歴史の新らしき理念が何であるかは、抽象の世界に尋ねられるべきではない。理念は現實そのものにおいて啓示されるより外はない。總じて理念は現實の體驗が合理化されて結晶するものであり、現實以外の何物からか演繹されるべきではない。現實を理念にまで高めることによつて、はじめてひとは現實の束縛から解放され、そして新らしき形成力を獲得するのである。と、さうわが歴史家は説く。<sup>3)</sup>——このやうな歴史の轉換期に臨んで、われわれが最初ひとしく體驗したものは、曾てなき時代の重壓感であり、そして現に最後に體驗しつゝあるものは外部からの壓迫感のみではなくて、逆に無限に深い内部からの自己解放的な衝迫感である。この感動の根源が何であり、そしてわれわれの決意の歴史的な

本體が何であるかは、われわれといへども知り盡してはゐないのである。<sup>4)</sup>

われわれは自己内部において依然として分裂を感じないのである。われわれは自己の内部における類、廢の深さに、いまさら愕然とする瞬間のあることを紛らさうとは決しておもはない。しかも、われわれは新らしいと信じたものの舊さを知りそめ、古いと思つてゐたものの生命的な新らしさを感じし、そして全體として異常な動搖の中で、現にをるところの歴史的時代がそもそも何であるかを知らうとして、自己内部に一つの對決の場を求めつゝある。既得の觀念と既成の知識をもつてしては、この歴史的現實を掴みがたいとすれば、残された一つはそれらと自己體驗との新らしき對決以外にはないのである。

もちろんこの現實の意味を幾分でも説きあかしてくれる先達の叡知から、われわれにして學ばないならば、われわれの體驗といふごときものも、殆ど意味を成さないであらう。われわれは現代の國家學者、國學者、歴史家、哲學者の思想から、多くのものを恵まれてゐるのみならず、時代の先驅たりし一經濟學者の國家思想に心を寄せつゝある。先達の言葉に聽かずしては、自己體驗といふごときものも、眞に深められることはむづかしいものにおもはれる。

現代は實にこのやうな時代である。すなはち文化諸科學の領域に屬する學者は、既存の知識の習得や再整理を事とする以外に、それと同時に、他の一面において自己の原始直觀の世界に何事が起つてゐるかについて深い反省を加へ、理論的・概念的の世界と體驗的世界とのあひだに開いたところの深淵と、その幅の擴がりにたいして、眼をふさいではならないのである。近代ヨーロッパ精神の典型的な一產物であり、その窮極的な一到達點でさへあつたところの純粹經濟學の方法にたいして、われわれが疑問の眼をむけるといふことは、他に同時にもう一つそれと對立する方法があたへられ

てゐるために、それに據りどころを得て、これを批評してみようといふやうな書生じみたことではない。われわれの歴史

的體驗と既成理論とのあまりにも懸絶した距離が、一般的な學問論の形において、一つの解決を要求するのである。それは決して單に一特殊科學の方法問題といふやうな、會てのごとき局部的な問題にとどまるのではない。この問題に近づくは、それが遙に宏大な問題の一環であることを、最初に知らなくてはならない。

われわれは政治經濟學の立場にあるものと一般に理解されてをり、そしてみづからその名において自己を主張したことも一再ではない。しかしわれわれは時として政治經濟學が最も必要とする歴史理論的側面において、缺けたものあることをみづから感じ、また、そのやうな批評に心から感謝した場合がなかつたでもない。われわれの研究においては、歴史理論が缺けてゐるのみではなく、一定の具體的方向を國家政策に提示するものとしての政策理論も形成されてゐるのではない。一層わかりよくいへば、われわれが到達してゐる範圍は、從來の經濟學にはゆる狹義の『理論』の内部問題にとどまるのであつて、客體理論的・交換理論的性格の體系が、いかにして主體理論的・配分理論的性格を具備してゐるかといふ方法的過程の問題こそは、われわれが力を集中した問題の全部なのである。しかし、かくも根本的な、いまだ内外學界を通じてそのやうな形では何人も手を觸れなかつた方法問題が、取りあげられてゐるといふことは、それだけで微力なる一人の仕事としては十分なのであつて、これになほ以上のごとき註文が加はるといふことは、それがどのやうな批評の形で來るにせよ、光榮として拜謝する以外にはない。

たゞ、こゝに語をつよめて一言しようとするのは、次ぎの點である。——われわれの研究において歴史理論が形成されてゐないといふことは、われわれの研究が歴史的現實から遊離してゐるといふことではない。われわれの『理論』研究が、歴史的現實によつて内面から促進されたものであることは、いかなる人も疑はないところであらう。われわれはむしろ逆に、歴史的理論の主張者が、却て歴史的現實の原始直觀から遊離する危険もあるべきことを警告しなければ

らない。そのみではない。唯物史觀のないし經濟史觀的な歴史理論が、はたして現代の政治經濟學の基礎的方法たりうるか否かも、問はれなければならない。また、日本經濟の歴史的考察が、そのまゝ日本經濟學の體系でもあるかのごとき主張をなすものをも戒めなければならないのである。さらに語を加へたい。われわれが政治經濟學の立場にあるといふことは、純粹經濟學の對立物としてみづから立つ、といふやうな小さなことではない。われわれにとつて政治經濟學の立場は、とりもなほさず國家科學の立場であり、われわれの思想的基盤には一つの學問論があるのである。學問論は國家論とむすび、國家論は歴史觀につらならざるをえない。もはや問題は箇々の特殊科學の方法論にとどまりうるのではなくて、全體的な學問論にまで立ち還らなくてはならない。これが、われわれの遭遇してゐる情況である。<sup>5)</sup>

(1)板垣興一著『政治經濟學の方法』(昭一七)一一五—一二五頁。

拙著『政治經濟學の問題』(昭一五)三三四—三三六頁。

同 『國家科學への道』(昭一六)序三頁、本文四—二六、八四・八五、一〇三、一一四—一一八、一二三、一三九。

(2)西谷啓治著『世界觀と國家觀』(昭一六)序六頁。

前出『國家科學への道』一四三・一四四、一八九・一九〇、二六五—二七〇頁。

(3)鈴木成高著『歴史的國家の理念』(昭一六)一六八頁。

(4)山崎靖純氏は、十二月八日まで對米英戰爭を回避すべしとの意見を把持してゐた人々または曾て親米英的であつた人々に關して、次ぎのやうに述べてゐる。——『こんどの戰爭の前には、いはゆる親米英とか、親獨伊とかいふ派が國內にあるやうに云はれてゐたが、……今日、日本の立つて行くべき方向が、唯一筋道はつきりして來た時においては、勿論さういふ對立は國內に全然ないと思ふが、例へば親米英がどこで誤つてゐるか、さうして、いかなる意味で間違つてゐるか、さうすれば、どういふ根本的反省が必要になつて來るのか、新しく建設すべき國內および東亞の秩序の性格といふものはどうあらねばならんのかといふことについて、曾て親米英だといはれる人が、深く反省したかどうか。そこに一つの疑問をもつんだ。勿論、その人が今日といへども親米英だといふのぢやありません。たゞ、そこに性格的齟へりがあるかどうかといふことなんだ。』(大串兎代夫・山崎靖純『日本の叡智の覺醒』)

こゝに繰り返かへして『反省』といはれ、『性格的驕へり』といはれてゐるものには、歴史觀における方向決定の問題が含まれてゐる筈であり、『反省』が苦惱とともに度重ねて來るのでなければ、道德的精力といふこときものがその人々に湧くことも難事であらうとおもはれる。

(5) われわれの學問論的な立場にたいして、最近、板垣教授によつて加へられた解釋は、最も簡潔にして要を得てゐるとおもはれる。いはく、『おもふに、國家の政治的現實を顧みず、國民の歴史の運命に超然として、およそ學問なるものは存在し得ないし、また眞の發展を遂げ得るものでもない。學問なるものは、著者「大熊」とともに言ふならば、國家的存在の全體的な精神表現であり、國民的生活の総合的な實踐體系を意味するものでなければならぬからである。近代の文化諸科學がその必然的な解體と再建の運命に逢着してゐるとするならば、必要なは何を措いてもかゝる學問的精神の自己恢復にある。かくしてこそ始めて國家活動と國民生活とを全體において統一的に把握する主體的立場に還ることができ、現世紀が課した學問的使命に對決することができるのである。——國家科學への道は世紀の光を浴びた學問の大道である。さりながら、この道は平坦な、踏まれた道ではない。われわれがみつから努力し切り拓かねばならぬ道である。然らばこの道への導標は何か。われわれが西洋的精神への單なる隸從に甘んじないならば、書齋的文獻史的涉獵を離れて、虚心に國民の日常的生活體驗に深く内在する最も單純なる原理に立ち還り、そこに生活の全領域を一貫して支配してゐるところの全體的な生活關聯の論理を發見するのぞかなければならぬ。國家科學への道は生活科學への道に深く通じてゐる。もはや經濟學は經濟の中からのみ經濟を眺めるといふ態度に終始することはできない。單なる經濟を越えたものの立場から、ひろく生活現實との全體關聯において經濟を把握するといふ態度、經濟とその限界領域とを統一的に認識する立場へ還らねばならない。經濟に關する固定的概念から自らを解放することこそは、國家科學としての經濟學の自覺から生れるのである。』(板垣興一教授『國家科學への道』書評)

## 2

歴史はすでに近代を去つたといはれる。そして全貌のいまだ明かならざる現代に入つたといはれる。近代といふ言葉は、含蓄のある、そして輝きのある、どつしりとした意味をもつた言葉である。すくなくともわれわれには昨日までさ

う信じられた。これに反して現代といふ言葉は、却て歴史性のない言葉であつた。すなはち新しい歴史的性格が近代との対照において附與されてをらず、むしろ近代の末端としての、平板な、むしろ平俗な意味が匂つてゐるやうにおもはれてをつた。にもかゝらず現代といふ用語は、徐々にその語感を改め、近代の否定としての歴史的性格が語られるやうに用ゐられ、そしてそのやうに理解されなければならなくなつてゐる。

現代はもはや近代史の一部分をなすものではないといはれる。別箇の秩序と別箇の精神とを樹立しなければならないやうに定位されてをり、およそ近代的なるものとは本質的に異なつた文明と社會との在り方が見いだされなければならぬといふ。その著大なる現れはほかならぬ現代國家の體制に求められなければならない。現代國家の本質は近代國家にたいする非連續性にあり、この非連續性は國家原理そのものの轉換を意味するとまでいはれる。<sup>1)</sup>

世界のあらゆる國家は、現に例外なく共通の根本課題に直面してゐる。しかもその根本課題の解決にあつて、すべての國家がいづれも國內體制の變革といふ方法に據らうとしつゝあるといふことが、これまた全世界に共通する一般的傾向である。いま、そのやうに歴史家が説くときに、かくのごとく世界各國の政治情勢を驅りたててゆく歴史の根源は何かといふ問題は、問はれてゐない。經濟學者であれば直ちにその動因を經濟的に分析し、そして答に苦しむやうなことはないのである。しかし、經濟的觀點なるものからは、おそらく世界史轉換の思想はこれを導きだすことができず、いはんや精神史・文化史的考察や、社會學的考察のごときは、おなじ思考の軌道からは生れてくることのできないといふ恐れがある。われわれは一歴史家の言葉になほ耳を傾けよう。——『二十世紀國家に共通する今一つのきはめて顯著な傾向は、國家の課題と任務との未曾有の擴大といふことであらう。思ふに、今日のごとく國家が廣汎にしてしかも多種多様な課題を擔つたことは、いまだ歴史上にその類例を見ないところである。……今日においては、

ロシア、ドイツはもとより、いはゆる自由主義國家と呼ばれつゝあるものにおいても、國家の司る領域はもはや政治だけではない。かつては教會、家族、會社の活動に委ねられてゐた諸領域が、今日ではすべて國家そのものの手に吸収せられつゝある。

『現代の國家は、單に内における秩序の維持と外に對する防禦とを任務とするだけでは足れりとしなない。社會の構造を内面的に規定し、文化と宗教とを建設せんとしつゝあるのである。このことは單に政府の權限の強化であり、國家權力の集權化であるといふだけでは片づかない。一面からいへば、社會と文化とが政治化しつゝあることを示すと同時に、他面から見れば、國家がいには社會學的性格をとりつゝあることを示すものであるといはなければならぬ。すなはちそれは國家の權力の増減の問題でなくして、國家の性質そのものの變化であると思ふべきであらう。そのよつて來たる所以は、おそらく國家そのものよりもさらに深きところにあるのであらう。總じて變革は政治よりも遙かに深いものである。近代の社會秩序の解體、文明の崩壞が、國家にかくのごとき龐大なる社會學的課題を擔はしめ、國家はこの課題をば、體制の樹立といふいはば社會學的方法をもつて解決せんと努めつゝあるのであらう。國家の課題は今日もはや政治だけではない。かつて中世において教會が單に宗教的機關でなく、社會と文明との原理であつたのと丁度同じ意味において、現代の國家は單に政治機關としてではなく、社會と文明との原理たらんとしてゐるのである。そして中世の教會が擔つてゐた權威主義オーソリタリズムを、今日の國家がまた擔はんとしつゝあるのである。』<sup>2)</sup>

かくして、この目前の事實のまへに立ちながら、われわれの國家意識が依然として十九世紀國家の通念に囚はれてゐることをもつて、わが歴史家は『甚だ奇怪なる事實』となし、その矛盾は、われわれの抱懷する國家觀念が抽象國家の觀念であり、しかもその抽象觀念を克服せんとするにあたつて、さらに新たなる抽象觀念をもつてせんとするところに

由來するのではないかといふ。こゝに行爲的體驗そのものの中に生ける理念を捉へよ、といふ説は、『事實そのものに歸れ』(zur Sache selbst) といふ言葉なごとも、わが國の學問精神の復興を告げる諸兆候の一つのやうにおもはれる。<sup>3)</sup>

しかし現代國家がこのやうに高次元の政治性において見いだされるまへに、かゝる國家の本體を捉へるべき國家思想または國家學説が形成されてゐなかつたと考へることは正當ではないであらう。

そもそも自由主義的な國家學は、國家を法的主體として見ることを根本特徴とし、國家を私的領域との對立において見るのみならず、その根柢には個人における自由の權利をもつて國家以前のものとする思想が横はつてをり、さてこそ國家をもつて個人生活の安全と活動とを保護するための法的施設のごとく見るものであつた。はじめから自己を國家から疎外した立場におき、しかも同時に國家の内部にあつて國家へ法的に關係するといふ態度は、國家と個人とのあひだの對立を意味した。そのやうな個人主義の立場からは、個人と個人との關係すなはち社會といふ以外の結合は考へられず、こゝにおいて社會的結合の發展は、むしろ國家を疎外し、もしくは國家の内面から國家を社會へ解消する方向を辿らざるをえないものと考へられた。それこそは自由主義的な國家觀の窮極であり、マルクス主義の國家觀も、近代思想の系譜において、根本から別種のものでないことは、屢々指摘されたごとくである。<sup>4)</sup>

しかるに、かゝる立場の一面性と危険性とは、國家間の關係が世界史的な規模において緊張を呈するにしたがつて、次第に意識にのぼらざるをえなくなつた。時代的思想と歴史的現實との衝突において、否定されなければならないものは思想である。新らしい現實を把握するためには新らしい方法がなければならぬ。現代國家が今日のごとき高次元の政治性において見いだされる以前に、すでに新らしい國家觀と國家學説とは、(その想源の一部を、おそらくランケの

ごとき史學者や、ラッツェルのごとき地理學者からも導きだしつつ、徐々に生成の過程にあつたものであり、そしていまや現代國家は、その歴史的自己形成に必要な思想的裝備を八方に摸索しつつあるものと見なければならぬ。やがて統一的自覺において、その思想の大きいなる體系化が求められる日も遠くはないであらう。

近代を去つた現代の特質は、何よりもまづ國家體制そのものの變質に求められなければならず、これを一層正しくいへば、國家觀念の轉換に求められなければならない。(——しかもその轉換が、ひとりわが日本において、國體原理の顯揚として、また復古即維新といふごとき原理によつて、なし遂げられてゆくものだといふことは、無限の感動を喚びさまたなければやまないのである。)しかしながら國家觀念の變革は、同時に一切の思考方法および思惟形式の轉換であり、文化諸科學・社會諸科學および國家諸科學の解體とその再建である。およそ近代的な科學の方法と思惟形式とは、すくなくともこれら精神科學の領域に屬するものについては、すべて根本から疑はれざるをえない運命にある。われわれはそのことを志向として論ずるのみでなく、われわれ自身の理論的操作全體をもつて、新らしき國家科學への一つの道を舒べようとするものである。しかしまづこゝでは、自由主義的な國家思想に對立して、新たな時代を語るべき國家學說の興隆について、なほひとりの哲學者が語りすゝめるところを聽かう。

『國家を單に法の見地からのみ見る立場の限界と一面性、それが含む實際的危險性は、國家間の關係が緊張すると共に意識に上つて來た。なぜなら、國家を單に内からのみでなく諸國家の關聯のうちに置いて見る時、即ち外から見る時、國家は現實に於ては單に法的主體としてのみでなく、力の關係のうちに政治的に行動する主體、然も歴史のうちに成長し時には滅びてゆき、その意味で恰も一個の人間と同じやうな生命體、として觀らるべき側面を呈するからである。』<sup>5)</sup>すでに第一次大戰の以前に、スエーデンの國家學者ルドルフ・チェレンは、かゝる外からの見方、國家を權力と

して見る見方を強調し、この見方をもつて内からの見方を包括する一層廣い把握であると考へ、そこから國家の新らしい概念が見いだされると考へた。(かれの名が地政治學とのみ結びつけて喧傳されるのは、決して幸福な徴候ではない。地政治學はかれの國家學の一部門であり、全體の部分であり、五分の一の部分である。) この見方と根本的に相通する立場に立つものに、夙に史家ランケがあり、現代においては史家マイネッケ、國家學者ケルロイターがある。これら一聯の人々には、國家を單に法の見地からのみでなく、むしろ一層根本的な見方として、國家の自然とか力とかの側面をかゝげ、この自然から法をも并せるところの統一に國家の生を認め、かくして國家をば政治的な統一體としての生活體、あるひはむしろ行動體であるとする見方があらはれてゐる。この見方は、國家的現實の把握として、最も具體的なものであり、高次元の政治性における現代國家の歴史的本質に迫つたものである。政治はもはや、分立する國家諸機能のうちの一つであるのではなくて、經濟や法その他すべての部面にたいして、それらを規制するやうな優位を占めつゝある。かゝる國家の動向を反映するものが、新しい國家觀の發展である。<sup>6)</sup>

——しかしわれわれは、チェレンでもランケでもなく、マイネッケでもケルロイターでもなく、わが日本において、現代國家の思想を展開した人をもたないであらうか？ 近代日本の國家學や政治學が、近代ヨーロッパ精神への隷從に終始したとしても、しかしわが日本において、現代國家の思想を樹立した學者が、いづれかの他の學問領域に見いだされないであらうか？ われわれは大串兎代夫教授の『國家權威の研究』(Die Staatsautorität im sozialen Sein, 1933)をいかに見るべきであらうか？ われわれはまた經濟學の領域において、現代國家または絶對國家の學說を夙に唱道した人として、作田莊一博士をいかに見るべきであらうか？ 博士の學問的性格が、近代ヨーロッパ精神の批判のうへに立つてゐること、なかにマルクス主義との内面的闘争によつて鍛へられたものであり、しかもその學問精神が國學

の傳統に根ざすものであること、のみならずその政治思想の一面が、國家社會主義と名づけられるまでに、眞髓から革新的性格を具へたものであること等は、今日ではあまねく知られてゐるとほりである。<sup>7)</sup>

われわれは今、大串教授や作田博士の學說に直接に立ち入らうとするものではなく、われわれの小研究を、これら先覺の思想との部分的關聯において説かうとするものではなほさらない。にもかゝはらず、こゝに先覺の名を、一二なりとも擧げなければならぬのは、現代日本の政治的現實が、いはゞ學問的雰圍氣から全く離脱して、赤裸々に轉々したと考へるごときは、甚だしい短見であるといふことを一言するためである。新らしき世界秩序の形成過程において、すでに歴史的創造者の地位を、決意として踏みかためた國民は、いまこそ文化創造者たる能力に目覺めなければならぬ。<sup>8)</sup>日本が現にこれほどまでの仕事をしてゐるときに、この運命を預言し、あるひは豫感せしめる兆候が、學問的領域において全く何もなかつたと考へるほどの虚妄はない。われわれは眼を開かなければならない。われわれは自己において個人的な確信を怠いで求めようとしてはならない。われわれの外に、しかし日本國民の内部に、われわれを確信に導くごときものを、隈なく尋ねなければならぬ。その態度が必要である。そのやうな内に求める態度の展開こそ、學問研究における自主的精神の恢復を意味するのである。わたくしは現に甚だ多くを、現代哲學者および歴史家の言葉に藉りた。しかし同時に、それらの人々が現代日本の學問的情況について展望するところが、多少缺けてゐるのではないかといふ懸念を、一言する義務ありと感ずるのである。

### 補註

西谷教授においては、現在の諸列強がそれ自體すでに思想的性格をもつた世界觀國家ともいふべきものになつてゐることに問題が認められてゐるのみならず、かゝる高度の政治性への動向の根本に伏在する問題の發見が主題である。國家理念の歴史的變遷への回顧において、權力と自由といふ二つの原理があくまで矛盾するものでありながら、しかもそれと同時に、勝利を占めた一方がその

自己發展のうちに必然的に他方を育てあげる力として働いてゐることを看取するのである。『絶対主義が自由市民を育成し、自由市民が國民共同體を育成し、かくして權力より自由へ、さらに自由より權力へと展開した歴史過程の結果として、封鎖的な身分その他の中間的夾雜物が解消されて、「國民」と「國家」とが直接に出會ひ、かくして自由と權力といふ矛盾する二原理が然も端的に一つに相出會ふ點をこの存在の中心とする國民國家への運動が現れて來たのである。』ここに國民國家といひ、現代國家といはれるものは、國民が共同體としての自覺に達し、政治的世界のうちにあたかも一個の生きた活動體であることと生形式をもたうとする意欲を示して來た狀態を指す。すなはち高次の政治性への動向なるものは、『共同體としての統一の意識に達した國民が、その意識を如實に表現するやうな統一形式にまで國家を整備しようとする運動、言ひ換へれば國家が一つの個體的生命たらんとする運動に外ならない』といふ。國民共同體が、一つの生活體であるとき統一に到達し、そのやうな個體的生命の表現として、新らしき國家體制にまで自己を形成し、さらにかゝる國家として形成されたみづからを、世界關聯のうちに保存するといふ段階が、現代國家である。したがつて現代國家における強度の規制は、個人を國家の基礎である共同體の統一のうちに繋がうとする國家の意志であり、同時に共同體自身の意欲である。それは個人を國家への關係において基體化せんとすることであるが、しかしその個人は國家の自然的な基體に没し去るのでなくて、それぞれ主體の立場に立つことが要求される。つまり主體的にみづからを基體化し、主體としてとゞまりつゝ基體につくことが要求される。われわれはこゝで著者の思想の到達點まで追跡し盡したのではない。著者にとつて、現代國家は本質的に近代國家の成熟せるものであり、これを言葉の表面から見るときは、鈴木教授における現代國家の思想と相反するもののごとくであるが、しかしそれは單なる言葉の表面上のことにすぎないかもしれない。われわれは鈴木教授において見られるやうな現代國家の歴史の解釋を重視すると同時に、西谷教授において見られるやうな現代國家の內面的分析を特に必要とする。『國力の全體を、精神的な諸力に至るまで、國家の生の最表面へ、即ち國家が政治的に活動する面へ集中する』といふやうな、主體における基體化の方向は、われわれにとつて實體的に取扱はなければならない主題にはかならず、國家總力秩序の形成原理は、現代國家がその高次元の政治性において、自覺的に把持しなければならぬものだからである。

(1) 『この二十世紀國家の十九世紀國家に對する非連續性は、ドイツやロシアのやうに、第一次歐洲大戰において一應既成國家組織が消滅した場合において最も明瞭であることはいふまでもない。すなはちソヴェット・ロシアはその原理と體制とにおいて帝政ロ

シヤを相續せず、ナチス・ドイツは同様に帝政・ドイツを相續するものではない。兩者の轉換が單に革命による支配者の更迭にとどまるだけでなく、國家原理そのものの轉換を意味するものであることは、兩者がいづれも既成の傳統に呼びかけることなく、専ら唯物史觀や民族哲學といふことき、それぞれに新しき歴史觀と、新しき世界觀との上に立脚するイデオロギー國家であることに徹しても明らかであらう。』(前出『歴史的國家の理念』一六一頁)しかし復古即維新の原理に立つ日本の國家において、この問題をどのやうに擱むかといふことは、著者にとつて、われわれにとつて、殘された問題である。

- (2) 前出『歴史的國家の理念』一六四—一六七頁。
- (3) 和辻哲郎著『倫理學』上卷(昭一二)序文參照。『政治經濟學の問題』一〇六—一〇七頁。
- (4) 前出『世界觀と國家觀』一一—一三頁。
- (5) 同、一三頁。
- (6) 同、一六・一七頁。なほ本節補註を見よ。
- (7) 大串兎代夫教授の著作は、『國家權威の研究』(昭一六)のほかに、『現代國家學說』(昭一六)、『文化政治の諸問題』(昭一六)、『民のこころ』(昭一七)等が擧げられる。しかし『日本國家論』(昭一七)は最近最も注目すべきものである。
- (8) 和辻哲郎著『面とベルソナ』(昭一二)所收『文化的創造に携はる者の立場』を必ず見よ。